

青宙は、続かない

千野 穂香

黒い。田舎の夜を一言で表せと言われたら私はそう答えるだろう。母と私の二人を乗せた車は、何度も舗装された道をまっすぐ進んだ。車を運転している母は安全第一を常に心がけているため、車のスピードはあまり速くない。そのため、窓の外をじっと見続けていた私の景色はゆっくりと変わっていった。しかし、その景色は決して華やかなものではない。こじんまりとした植え木。何本も設置されている街灯。加えて、街灯は虫があちこち大量に付いているのと、街灯その物が壊れているせいで本来の夜道を明るくするという役目を果たしてはいなかった。車は大きく右に動き、同時に自分の身体は左へと傾いた。大通りが自分の目の前に広がる。両側には、幾つもの飲食店が広がっていたが、どこも経営しているようには見えなかった。たまに赤提灯がついた居酒屋から酔った小太りの中年男が、大声で何か叫びながら若い男に連れられ、駅までの道を歩いている姿が見えるだけ。視界に見える殺風景な現実。ふと、自分の心を表しているように思えて身震いした。すると、黒い視界を映す窓にびっと矢のような水滴がついた。その矢は次々に窓へ跡をつけては重力に沿って下へ落ちていった。蛍光灯の下を見ると、雨が降っていることが分かった。小降りかと最初は思っていたが、突然量が増え窓に当たった水滴はどんどん窓の下へと流れていった。風も吹いてきたのか、度々車が横揺れするのが分かる。それでも私は窓の外を見続けた。大雨だの、強風だの。そんなこと、考えたくもなかったから。

目的地に着いた頃には、道の水溜りの水が明らかに増えていた。車内に入っていた、傘を差して、目的地の入口へと向かった。強風のせいも、全くと持って傘の役目は果たされていなかった。

「すみません、遅れてしまってます。」

「とんでもないです。どうぞ、中に入ってください。」

人が一人、ようやく入れるくらいの玄関から私達親子が入った。私達が入ろうとすると、風雨も共に部屋へと入ってきたので慌てて二人ともせかせか動いた。私達が部屋に入り終わると、その事務担当の人は急いで扉を閉めた。狭い造りの部屋というのが一瞬で分かった。今まで、暗い夜道を見てきた私に故障していない電灯の明かりが一気に視界に入った。あまりにまぶしいのが辛くて、目をぎゅゅとつぶった。

「すみません、ここしか空いてないんですけれど。」

「いいえ、じゃあ説明をお願いします。」

事務の人に言われるまま、指定された席に座った。今、私は新しい英語塾を探していたのだ。それで、今夜説明を受けに良さそうな場所へ向かったのだ。しかし、自分にとっては英語塾へどこに行くなど関係無かった。ただ、親の言われるままにそこへ入ろうと決めたのだ。私の性分柄、それは一番嫌なことなのだが。

「えっと、鬼頭……きとうさんですね。」

「あの、すみません。それ、おにがしらって言うんです。」

「あつ、そうでしたか。すみません。」

事務の人は、自分の間違いを指摘されて、慌てたのか、資料を大量に下に落としてしまった。それを母も手伝っていた。まさか、今から入ろうと考えている人達の名前も把握していないなんて。込み上げてくる苛立ちを膝に置いていた手に全てぶち込んだ。

「それで、私達としては金曜日を希望したいのですが。」

「はい、金曜日ですね。……えっと、そうですね。」
突然事務の人の顔が陰しくなった。

「金曜日でも人数的には全然問題にはなりません。しかし、この時間帯だと男の子しかいないんですよ、それでも良ければ何ですが。」

私は若干、目を見開いた。私は男子が嫌いだった。男が嫌いなのではない。テレビに出ている俳優や細身のアイドルにあこがれを抱いたことは他の女子と同じように私だってある。そうではなく、考えや経験が未熟なくせにでかい態度を取って、自分を大きな人間に見せようとする。そんな浅い考えしか持たない生き物。それが私にとっての男子だった。男子は私の嫌悪の塊でしかなかった。しかし、感情を持った幼少の時からそう思っていたのではない。原因は小学校五・六年の環境にあったと思う。五年生の春。小学校生活二度目のクラス替えが行われた。その時の私のクラスは誰が見てもおかしなクラスに出来あがっていた。学年全体で態度の良くない男子が一気に集結したのだ。私の後ろではひそひそと何か話している同級生が多くいた。きつと、私のクラス構成について話しているのだろう。しかもプラスでは無いことを。私は、空気がだけでそう察してしまったのだ。でも、どんなに悪い男子でも軌道修正をしてくれる大人がいれば、大事を生み出さずに済むだろう。クラスは駄目でも担任なら。私は、密かに淡い期待を寄せていた。しかし、それはもろくも崩された。担任は異常な程に真面目だった。生徒に異変があれば、常に声をかけ励ましたり応援したりする。皆に分かりやすい授業を行おうと教材をたくさん作って説明する。一見、こんな姿の教師は理想的に見えるかもしれない。けれど、私のクラスはその真面目さを全て逆の方向へと傾けた。その結果、学級崩壊。男子と女子の間には深い溝が生まれ、先生も病んで休みがちに。最後の小学校生活は最悪な物へと変わったのだ。私は黙ってしまった。本当のことは話せない。私情だけでは拒むことが出来ないことは分かっていた。本当に金曜日しか余裕のある日は無いのだから。親の意見に反対の言葉を言う訳にはいかない。それに塾なら知り合いもいないだろう。私の友人でこの塾に入っている人は確かいなかったはずだ。私の身の上を知らない人なら何も言うことはないだろう。

「私、ここに入りたいです。来週の金曜日からお願いします。」

初の塾に行く金曜日がやって来た。帰りの会が終わわり、机の中に必要な書類が無いことを確認した私は数名の友だちと共に校庭へ出た。いつも以上に、その日は帰りの会が延びてしまったため、既に校庭には全校生徒の半分以上が集まっていた。実は、私の小学校の校則の中には下校班のメンバー全員が揃わないと、その地域の担当の先生に帰宅を許されないというものがあるのだ。つまり、一人が遅ればその分他の班員は待たなくてはいけなくなり、待たせる時間が長い分だけ班員の気分を損ねるという訳なのだ。交通安全のために行っているのだということは、理解しつつもこの決まりは私にとって非常に面倒くさいものであった。私と同じようにどこかしら塾に言っている人は、もちろんいる。他にも家の用事や急用がこの部類に入る。その中で、班の班長もやっている人は、あらかじめ副班長に用事があることを伝えて早めに帰宅しなければならぬのだ。自分はその項目に当てはまっているのだ。それでいて、今日は塾だということも朝中に言わなかったために、この校庭から副班長を探さなければいけないのだ。途方もない作業。手間がかかる。でも、用件を伝えないと班員は帰れない。どちらが大切かと言えば、もちろん後者の方になる。それに私の班がいつもある場所は決まっていた。いつものようにそこにいてくれれば、すぐ用件を伝えられる。友達には、バイバイと早口で言い、足早に副班長の元へ向かった。

幸い、用件は早く済んだ。下級生の何人かが、遅れた私を睨んでいたが。肝心の副班長は、温

和な性格のため「頑張れよ。」と言って、先生の元へ帰宅の許可を取りに行った。「ありがとう。」と彼の背中に向かってそれだけ言うと、私は駐車場まで全速力で走って行った。駐車場には既に祖母の車が置いてあった。私は残り数メートルの距離を走り、慌てて車に入った。

「確か、塾の時間って四時半だよ。今から間に合うかな。」

「何言ってるの。塾は五時からよ。」

私はびっくりして祖母に渡された菓子を落としてしまった。まさか、時間を間違えちゃうなんて。一生の不覚。そう思いながら車はどんどん目的地へと近付いて行った。結局、塾が始まる三十分前に目的地に着いた。でもこの時間ならまだ人はいないだろう。そう油断していたのが悪かったのかもしれない。階段をいつもよりゆっくりに上がり、扉を開けると夕暮れの先に誰かが立っていた。まさか、その場にいるとは思わなかったので息を吞んでしまった。

「名前、何て言うの。」

「はっ？」

「だから、名前。新しくここに入ってきた奴だろ、お前。何て呼んだら良いか、分からないから。」

「えっ、ああ。おにがしら薫。」

私は自分の名字をわざと強調して言った。ここに入った時と同様に、間違えられてもおかしくないからだ。

「おにがしら？」

「うん。」

イエス、とはつきり言うとその男子は、顎に右手をついたり腕組みをしたり。さらには、顔を下げた床ばかり見ている周りをせわしなく動いたりしていた。何か、考えているのだろう。疑問に思っても無理はない。おにがしらなんて名字、私だって親戚以外に聞いたことがないもの。名字が変わっているこんな奴とこれから付きあっていくのか。そう、名字だけで相手の人格を全て判断するような考えを巡らせているに違いない。少なくとも今まで出会った男子はほとんどそうだったから。私は、目の前の男子の考えを悟った感じがしてふっと微笑んだ。すると突然「あ！」と何かひらめいたような声を出してその男子が大きく頭を上上げた。いきなり叫びに近い声を出したものだから私の肩は激しく上下に動いた。

「もしかして、おにがしらって鬼に頭って書くの？」

お互いの時が一瞬止まった。自分の名字のことを聞いていることにさえ、最初気づかなかった。あまりにも唐突な質問に私の目はいつもの二倍以上に大きく開き、眉間は皺を五、六本作った。まさか、今までの時間ずっとおにがしらを漢字でどう書くか考えていたのだろうか。私が思っていた考えは。名字に対する中傷は。今まで考え続けていた暗いものが雪崩のように一気に落ちてきた。思わず頭を抱えて、暗いものを口から全て吐き出した。

「えっ、違うの。他に何か漢字当てはまるかな。」

また、その男子が床を見始めた。私の考えが、この男子には何一つとして伝わっていないらしい。つくづくあきれた奴だ。そう思いながら、私は顔を上げて言葉を発した。

「合ってるよ。」

「……えっ。」

「合ってるって言ったの。」

「嘘。本当に。」

「本当。鬼に頭でおにがしら。」

「うっわ。やった。合ってた。超嬉しい。」

男子の顔は目元から明るい表情に変化していった。心の底から嬉しく思ったのか、男子は両腕を縦に大きく振り続け、最後は私にガッツポーズを見せた。先程の透き通った印象は微塵も感じられない程だった。大きくにっと笑った口を見ると、綺麗に並んだ歯が夕暮れの光の加減のせいか余計に白く見えた。白すぎると言っても良い程の歯を羨望の眼差しで見つめる。同時に素直に喜ぶ男子の表情を見て、落胆していた一時の記憶は薄れてきたのだった。

「きとうって読まないんだな。きとうなら俺、何人か知り合いいるぜ。」

「普通はきとうって読むんだけど、ウチは違うんだ。」

「ふーん。そうなんだ。おにがしらか。何か、かっこいいな。」

心の中で、何かが弾けた。色々な場面で聞くその言葉が妙に新鮮なもののように感じる。かっこいい。今まで言われたこともなかった。この言葉を良い意味でとらえて良いのだろうか。私の望むように考えて良いのだろうか。今、人生で一番鼓動が速い気がする。そんな余計なことを感じながら、何とか会話を続けようと努めた。

「かっこよくなかないよ。」

「えっ、そうかな。」

「そうだよ。だって私、この名字のせいでかなり損してるし。」

「損？まさか。する訳ないよ。」

「ううん、してる。こう見えても私、学校じゃ口調が荒いんだ。掃除してない奴に掃除しろ、って注意したら名字と一緒に鬼みたいだ、って言われるんだよ。行事にちゃんと参加しないから呼びかけた時も同じ。鬼が現れた、って言っては逃げて結局やらなかったりすることだってあった。余計に目が大きいところも鬼の目だってからかわれて。この名字、お前が考えている以上に良いところ無しなんだよ。」

言いたいことを全部言いきって、やっと自分の理性を取り戻した。今さら取り戻しても遅いというのに。男子の表情にさっきまでの喜びは無かった。何も感じ取れない無の表情だった。でも、今度こそ変な奴だと男子は思ったであろう。会ってすぐの奴に自分の意見を根本から否定され、おまけに愚痴まで浴びせられた。頭おかしいんじゃないのか、こいつ。私からは見えない男子の背中にはきつとそんなような言葉が無限に連なっているに違いない。後悔を隠すことは出来なかった。口を開けたり閉じたりしながら弁解をしようと脳内からありったけの言葉を出そうとした。でもどれも良いものとは言えない。どうしよう。良い言葉をかけてくれた唯一の男子にこんなことを言ってしまうなんて。目の奥から何かが零れてしまいそうになって、何とかそれを防ごうとぎゅっと目をつぶり肌に爪を立てこぶしを握った。

「ねえ、お前のどこが鬼なの。」

は。赤くなった肌が一瞬にして元の肌色に戻った。非難の言葉が返ってこない。二度目の期待外れな言葉に今度は膝の感覚が無くなって、身体ごと床につけそうになった。私のことを何とも思わなかったのだろうか。返ってきた言葉に私を馬鹿にしている要素はどこにもなかった。そして私ではなく、私のことを毎日悪く言っている学校の男子に言っているような気がした。

「俺から見て、お前は全然鬼じゃない。それってさ、本当のこと言われたからどうにかして自分を正当化したくて言ってるだけだよ。それで、お前が何も言わなくなったら自分の勝ちって……そうだな……自己満足みたいなものしてるだけだよ。」

自己満足。あまり、良い意味で聞いたことはない。それを学校の男子に対して言っているのだ、こいつは。目の前の男子にシャボン玉のような綺麗な泡がふわふわと浮かんでいるように見えた。日光に当たって、シャボン玉はより一層輝いて見える。私を正しいと言っているのだ。似たような言葉は、先生を含め色々な人にも言われた。でもどれも自分の体裁だけを守っているような気がしてならなかった。でもこいつの言葉は、そうじゃない。何というか。純粹なのだ。丁度、目の前にあるシャボン玉のように。だから素直に受け止められる。今は、この言葉がずっと自分の身体を通っていくのだ。

「薫は何も間違っちゃいない。誰かを注意するなんて勇氣がいるし、簡単なことじゃないんだぜ。俺さ、今の話聞いてお前のこと英雄って呼びたくなった。」

また、にかつと笑った。すると、目の前にたくさんあったシャボン玉が消えて、ようやくその男子の姿をとらえることが出来た。ずっと、見えていた瑠璃色の光は目の色だった。全体的に色白で、淡いピンク色の唇が映える。肩にかかるか、かからないぐらいかの少し長めの髪には茶色が混じっていた。全体的に見て顔のパーツはあまり、日本人の特徴には当てはまらない。でも、とてつもなく美しい男子だったのだ。その男子から美しい言葉が出てもおかしくないとはいきり思った。部屋中がオレンジ色に染まる中、えくぼを私に見せている彼とそれをじっと見続けている私。奇妙すぎる空気が二人の間には漂っていた。でもそれを彼が美しく変えているように私は感じたのだ。

「今日からよろしく、薫。」

今、ふと感じた。こいつはさつきから私を下の名前で呼んでいる。会って間もないのに下の名前と呼ぶなんて。変な奴と思いがちでも内心、少し喜びがあった。

「よ、よろしく。ウチもさ、名前聞いてなかった。名前、何て言うの。」

「ん？あ、俺。俺はね。」

「こんにちは。」

その時、他のメンバーと思われる男子が私の入って来た玄関と同じ入口から入って来た。事務の人が言っていたように視界に入ってくるのは男子だけ。名前を聞けなかった男子はその男子達を知っているのか、私に見せたのと同じ笑顔で駆け寄って行った。私は何をすることもなく、その場突っ立っていた。ふと、時間が気になって壁に掛けられていた時計を見た。私が来たときから数十分が経っている。たったそれだけの時間で、私と男子の関係は既に変わっていたのだ。初めてのことが多すぎて、今までの時間は夢だったのか現実だったのか。頭の中で区別がつけられなくなっていた。そんなことを考えている私をよそに男子達は自分達の定位置に次々と座っている。私もはつとなつて、机に乱雑に置いたカバンを取って空いている席を探した。右往左往動している最中、自分と数十分間話をしていた男子とは、別の男子の言葉が聞こえた。

「おい、そら。新しいゲームソフト買ったんだ。一緒にやろうぜ。」

動く足を止めて、声のする方へ身体を向けると、二人の男子が笑いながらゲーム機を取り出していた。明らかにさっきの声は、会話をしていた男子の声では無かった。ということとは。

「……そらっ言うんだ。」

そら。普通に合っている。名前を付けたご両親のセンスに何故か感心してしまった。あいつのご両親もあの目を見てそう思ったのだろうか。きっとそうだろう。ようやく今になって、弾けたものが分かった。思い込み、それにマイナス思考。どちらにしても一般的に考えて、良くない物が自分の中で無くなったのだ。素晴らしい進歩だと思った。それを覚えてくれのが……。そんなこ

とを思いながら、適当な空席に私は腰を下ろした。

初めての塾の日から数カ月が経った。塾のメンバーの男子達とは自分が思っていたよりも早く仲良くなった。男子しかいない環境で私は、スリッパ投げや鬼ごっこなど男子がするような遊びを普通にして、戦闘物のゲームをし、くだらない動画を見ては塾のメンバー全員が爆笑した。授業を少しだけ、さぼったこともある。ちよつとだけなら、問題ねえーって、と言われ私はその話にのった。いけないこととは自分でも分かっていた。でも塾の男子達とこぞってさぼるといのが、自分の中であつても楽しく面白い物のように思えたのだ。結果的に先生には怒られたが、それも良い思い出となって私の心に刻まれた。あんなに嫌いだった男子が自分の中で良い存在へとなくなっていく。それは完全に予想していない意外な展開であつた。でも、男子が私を個人として確立してくれた。それは、自分が一步成長したことにもつながつた。私は、成長のきっかけは、何もかも宙にあつたと思つた。初めて、会つた日に私のことを良い奴だと言つていた。あれがなければ、私は何も変わらず子どもの考えでいたのかもしれない。宙と過ごす数十分の時間は自分にとって欠けてはいけない大切なものだった。そして再びやってきた、金曜日。浮ついた気分で階段を上っていると、上から零れてきた冷たいものが髪に当たつた。

「うっわ。」

いきなりのことで私はものすごく驚いた。

「おい。」

上から聞き覚えのある声が降つてきた。濡れた髪の部分を押さえながら、上を見上げた。すると、濡れた白い紙を持った宙がこちらに手を振つていた。

「何すんだよ。濡れたじゃんか。」

「え？うっそ。ごめん、ごめん。」

「ごめんじゃ済まねえぞ。てめえ。」

そう言うと一緒に残りの階段を上りきつた。背中から悲鳴じみた声が聞こえた気がした。荒々しく扉を開けると、窓から離れた宙がぐるぐると走つていた。

「同じことしてやるからな。」

そう言うのと、私は洗面所へ向かつてポケットに入つていたティッシュを濡らし、宙に当てようとした。机の周りをぐるぐる回り続けた。笑い、叫び、たわいもないそんな空気が私は大好きだった。少し、疲れてそばにあつた窓に腰を下ろした。

「今日変なあだ名付けられたさ。」

「え？何。教えて。」

「ウインナー。」

「ウインナー？」

「ほら、ウインナーの会社もさ他の企業と一緒に幾つかあるだろ。その中で私の薫の字を使ったウインナーがあるっていうのを同級生から聞いてき。私って異常に、ウインナーが好きなんだよ。死ぬ時に何食べたいですか、って聞かれた時も私きつとウインナーを選ぶと思うんだよね。どんなもの食べてもウインナー以上に勝る食物なんて、無いと思つてる。それを話したら、じゃあお前はウインナーで良いやつて言われて。何か、ウインナーを馬鹿にされた気がしてならないんだよ。私。」

「何、それ。笑える。」

「笑いごとじゃないんだよ、こっちは。」

「俺もその話聞いたら、ウインナーって付けてるよ。」

「冗談も大概にしないと、こぶしが横から振ってきますよ。」

「それだけは止めて。」

そう言い終わると、近くのホワイトボードに置いてあったペンで壁に宙がウインナーと書いた。

「あ。何書いてんだよ。消えないじゃん。」

「えへへ。わざとこれで書いたんだよ。」

「また、こしゃくなことを。」

「消えないよ、絶対。」

壁をこすりつけても消えない、でも私はふとこれも思い出だと思って消すのをいきなり止めたのだ。

「どうした？消さないのか。」

「……あのさ、私さ。」

少し、言葉に詰まった。でも、言葉に私は出した。

「私、受験するの。」

宙の顔が複雑な物へと変わった。でもいつもと同じように直ぐに笑顔を私に向けた。

「頑張れ、応援してる。」

受験が終わり、三月。車で家に帰る途中、祖母に白い紙を渡された。「良いから見なさい。」とだけ言われ、不思議に思いながらも何回も折られていたその紙を広げた。見てみると、その紙はばらばらの数字の羅列しか書かれていなかった。しかし一瞬で私は、それが何なのか何を表しているのか、分かった。心臓が一回大きく上に動く。既に左隅から数字を一つずつ丁寧に見つけた。確か、自分は受験番号が早かったからあるとしたらすぐ見つかる。そう感じながらも期待と不安の入り混じった感情で、指だけがどンドン右に進んでいった。そこには私の受験番号があった。私は合格したのだ。それを知って、私は底知れない喜びを感じた。そのまま、私はいつも行く塾へと向かったのだ。

「よっ、宙。」

いつもと同じ調子で部屋に入るといつもと変わらない窓のそばに宙は座っていた。ぼーっとしているのか、私が入ってきたことに気づいていないようだった。あまり、考え事をするような奴では無かったがこいつも物思いに耽ることがあるのだと思った。

「おーい、宙。」

少し、大きめの声で呼びかけると目を軽く見開いてこちらに顔を向けた。私は顔の横で手を振り

「大丈夫か。」と尋ねた。

「おう。」

元気がない。今日の宙は少し違う。直感でそう思った。声色が違うというのも理由の一つでもあるのだが。声だけではない。もう全てにおいて、今日の宙は青菜に塩状態だったのだ。一度も見ることが無かった姿だったために不安になった。私自身、もやもやとした感情を抱きながらいつもの席に荷物を置いた。

「受かったか、清明。」

自分が言おうとしていたことを先に言われた。状況把握だけはいつも早い。変わらない姿が垣間見え、少しだけ不安が無くなった。

「うん、受かった。」

「……やっばりな。」

苦笑いと世間では言われるような笑顔だった。

「お前、頭良いもんな。」

「どこが。そんなに良くないぞ。」

「いつもの塾の様子を見てれば分かる。」

「とにかくおめでとう。」

「おお。ありがとう。」

変な会話を続けたまま、塾の授業は始ってしまった。いつもと変わらなかったが、何かがおかしいように思えて仕方なかった。そして、最後の授業は終わった。

「お前、これから塾どうすんの。続けるの。」

「ん？もうやめる。手続き、もうしちゃったんだ。」

「もしかして、清明中学に入るから？」

「うん。結構あそこ、ここから遠い場所にあるじゃん。部活も入ったり、学園祭とかの行事が重なったりしちゃうえば、塾行く時間も無くなっちゃうかなって思ってる。」

「時間の余裕が無いつてことか。」

「んー。まあ、そんなところ。」

「そっか。」

「実はさ、俺もここやめるんだ。」

「えっ？」

「バスケ、やりたいんだ。今まで以上に。地元の中学でもバスケ部に入りたいって思ってるしな。」

「俺は、勉強以上にバスケ頑張りたい。」

「随分、熱心だね。」

「まあな。」

「じゃあ、お互いここやめるんだ。」

「そうだな。」

「これから、まだお前授業あるんだっけ。」

「うん、もうすぐ始まる。」

「じゃあ俺、もう帰るから。」

「うん、じゃあね。」

「じゃあな、おばさん。」

「は？おばさんじゃねーし。まだ12だったの。」

「あはははは。」

変な空気を残したまま、私は授業のある教室へ向かった。しかし、向かう足は異常に重く感じて、前に進まない。そう思った瞬間、私は無意識に宙が帰る玄関の方へ向かい直した。すると、瑠璃色の瞳がこちらをじっと見ていたような気がした。明るさを失った瑠璃色の瞳。下がっている眉。自意識過剰だとは、思った。でももしかしたら、もしかしたら。今、自分が喉の奥から今、出さなくてはいけない言葉。後、少しで。そんなことをしているうちに、宙は目の前からいなくなっていた。空虚な教室。私しかない部屋の蛍光灯の光が眩しい。私は、只そこに立ち尽くしていた。

授業が終わった。辺りに光の無い通り道。そこに白色の光を放つ私の家の車が道路脇で私を待

っていた。小走りで車に向かいドアを開けると、細身の父が低めの声でおかえり、と私を見ずに言った。いつもなら反射的にただいまと言う私ではあったが、何故かその時だけは何も言わずに乗車した。父は普段と様子が違う私に気づいていないのか、車を勝手に動かした。無言状態が続く車内で、ポルノグラフィティの曲がずっと流れていた。私は、この塾に初めて来た時と同じように窓の外を見ていた。変わらぬ風景だった。でも、私はここに好んでずっと行っていた。ずっと。その時、ふとサウダージのサビが妙に耳に響いた。明るくない戦慄をポーカルが一生懸命歌っていた。「許してね、恋心よ。甘い夢は波にさらわれたの。いつか、また会いましょう。その日までさよなら、恋心よ。」甘い夢。その言葉が、私の頭に重く鐘を打つ。宙と過ごした夕暮れの時間。一週間に一回しか、会えない彼の笑顔を見ることが大好きで、もっと笑って欲しいと宙が思える話題を見つけて、二人しかいない時間が、どれだけ私にとって必要なものだったか。宙は、もうここには来ない。私もここに来ない。もう、会えない。さらわれた。また会いましょう。そんなこと、今の自分には出来ない。この先の運命を想像すると、本当に出来ない。この先、絶対にこんな胸が痛む感情は抱かない。そんな考えが頭を巡らしていた時、視界に桜の花びらが映った。たぶん、真正面の高校に生えている桜並木の一本のどれかだろう。どうしてか、その時は月明かりが明るくて。車の窓には泣いている私映っていた。嗚呼。そうだったのだ。私は、恋をしていたんだ。宙に。声も姿も性格も笑顔も宙からあふれ出る全ての物が。愛おしいと思った。この思いを私は、喉から出したかった。なのに、出せなかった。後悔の念は、鼻水と涙と混じって頬を伝っていく。許して、本当に許して。弱かった私の心臓に何度もこぶしを当てた。そして、運転している父に気づかれないように声を押し殺して泣いた。その時の高校から吹いてくる桜の花びらだけが、只只美しかった。

それ以来、私は恋をしていない。